

令和2年度農作物有害動植物発生予察情報 特殊報第2号

令和2年11月25日
山形県病害虫防除所

- 1 病害虫名 トルコギキョウえそ輪紋病
- 2 作物名 トルコギキョウ
- 3 病原名 アイリス黄斑ウイルス (*Iris yellow spot virus*; IYSV)
- 4 発生の経緯
 - (1) 令和2年7月下旬、庄内地域のトルコギキョウ施設栽培において、葉にえそ輪紋や不定形えそ斑、茎のえそ条斑、花茎の屈曲を伴う症状を示す株が確認された(写真1~5)。
 - (2) これら症状はウイルス病によるものと疑われたため、症状が見られた株を国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構遺伝資源センターに同定を依頼したところ、RT-PCR法による検定の結果、アイリス黄斑ウイルス(IYSV)によるトルコギキョウえそ輪紋病であることが確認された。
 - (3) 本ウイルスによる病害は、平成8年に千葉県のアルストロメリアで初確認され、現在までトルコギキョウ、ネギ、タマネギ、ニラ、テッポウユリ等全国32の都府県で確認されている。東北地域では、平成19年に秋田県、宮城県、福島県のトルコギキョウ、平成24年に岩手県のトルコギキョウで報告されている。
- 5 本病の特徴
 - (1) 株の中位~上位葉にえそ輪紋、えそ斑点、茎のえそ条斑を生じるほか、葉の黄化や萎縮、茎の屈曲が見られる。
 - (2) ミカンキイロアザミウマが媒介するトマト黄化えそウイルス(TSWV)やインパチェンスえそ斑紋ウイルス(INSV)による葉の病徴と酷似しているため、病徴だけでの判別は困難である。
- 6 病原ウイルスの特徴
 - (1) 本ウイルスは、トマト黄化えそウイルスやインパチェンスえそ斑紋ウイルスと同じ *Tospovirus* 属に属し、ネギアザミウマ(写真6)によって媒介される。
 - (2) ネギアザミウマは、幼虫時に感染植物を吸汁することで本ウイルスを獲得し、終生伝搬能力を保持するが、経卵伝染はしない。汁液による接触伝染の可能性は低く、また、種子伝染、土壌伝染の報告はない。
 - (3) 宿主植物は多く、ユリ科をはじめ17科40種以上の植物で感染が報告されている(表1)。
- 7 防除対策
本ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底する。
 - (1) 施設内にアザミウマ類が侵入するのを防止するため、施設の出入り口や側面を寒冷紗や防虫網で被覆する。
 - (2) 新たに施設内に苗を持ち込む時は健全な苗を選び、アザミウマ類の寄生の有無を十分に観察し、寄生が確認された場合は防除する。
 - (3) 青色粘着板を用いて媒介虫の発生を観察し、発生初期の防除に努める。
 - (4) 圃場内外の雑草や不必要な花き類等は、アザミウマ類の増殖源となるので、速やかに除去し適切に処分する。
 - (5) 発病株は伝染源となるので見つけ次第抜き取り、施設外に持ち出し適切に処分する。
 - (6) 抵抗性害虫出現防止のため、同一系統薬剤の連用を避ける。



写真1 圃場での発生状況



写真2 葉のえそ輪紋



写真3 葉の不定形えそ斑



写真4 茎のえそ条斑



写真5 花茎の屈曲



写真6 ネギアザミウマ成虫

表1 IYSVの感染が報告されている主な植物

科名	植物名
ユリ科	ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ、ニンニク、テッポウユリ
リンドウ科	トルコギキョウ
アルストロメリア科	アルストロメリア
アヤメ科	ダッチアイリス
ヒガンバナ科	アマリリス、スイセン
アブラナ科	ダイコン、ハクサイ、ブロッコリー、ミズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウ、タネツケバナ、ナズナ
セリ科	ニンジン
カタバミ科	カタバミ
キク科	チチコグサモドキ、ノボロギク
ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ、トキワハゼ
シソ科	ホトケノザ
スベリヒユ科	スベリヒユ
スマレ科	パンジー
ナデシコ科	コハコベ、オランダミミナグサ、ノミノフスマ

注)植物防疫第67巻第12号(2013)「静岡県におけるトルコギキョウとネギ属作物のアイリス黄斑ウイルスによる被害実態と防除対策の現状」より引用